

幼稚園教育に学ぶ

小川 聖子

平成八年四月からの一年間、生活科の研修としてお茶の水女子大学で学ぶ機会を得た。その際、大学の授業の一環として、附属幼稚園の保育を参観させていただく幸運に恵まれた。幼稚園教育について学ぶことは、「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分

自身や自分の生活について考える」ことを目標とする生活科にとって、大変有意義なことであると考える。ここでは、一年間の幼稚園での観察を通して学んだことを、年長児クラス（五歳児）での製作活動を中心に、具体的に述べてみたい。

友達とのかかわりの広がり

——車作りを通して——

このクラスでは、十月ごろから車の製作が始まった。最初は、二、三人が部屋の隅の方で作って遊ぶくらいであった。五か月後の二月には、男の子の半数である八人の園児が、「ミニ四駆」と呼んで夢中で車を作って遊ぶまでに、活動の広がりを見せている。また、その間、作られる車にも変化があった。はじめは、ダンボールをハガキ大の長方形に切って車体にして、その裏にストローを二本平行に張り付ける。そこに、竹ひごの車軸を通して、フィルムケースのふたをタイヤにして付けただけの簡単な作りの車であった。それが、素材は、ダンボールよりは薄くて切り易いが、ある程度の硬さをもった板ボール紙へと、形はより流線形へと、工夫され変化してきた。このような過程で、車を作って遊ぶとい

う活動を通して、友達とのかかわりが広がっていったE男について述べてみたい。

E男は、工作が好きで、手先も器用。かなり高度な作品を作っている。集団でのごっこ遊びや砂場遊びに加わることは余りなく、どちらかというひとりで黙々と製作を楽しむタイプであった。細長く切った紙を丸めて球形にして巧みにボールを作る（九月十二日）、飛び出すロケットや大きな船を作る（九月十九日）、砂場で砂鉄を集める（十月十七日）など、次々と一人で作っていく。しかし、それらのおもちゃを使って友達とかかわって遊ぶ姿は見られない。

十月二十四日、この日も、部屋の入口付近にある担任用の机で、ラップの芯を利用した笛を作っていた。その近くの床の上で、I男とO男が、先週から作り始めた車で遊んでいる。E男は二人の活動が気になるらしく、製作の手を休めては、じっと見てい

る。声を掛けたり、仲間に入ることはしない。一時
間ほどして、車遊びをやめたO男が、担任に亀の作
り方を教わりにくる。これは、以前E男が作って
たものであったので、担任は「E男君のほうがよく
知ってるみたいよ」と言つて、E男に教わるように
促す。O男は、相変わらず担任用の机で製作してい
るE男のところへ行くと、作り方を教わる。それか
ら三十分程、二人のかかわりが続く。

二週間の間があいて次に観察した十一月七日に
は、車にかかわっているのが、E男、O男、I男、
J男、B男の五人に増えており、E男も手作りの車
を持って、遊びに加わっている。B男の「テスト
コース、行こうか」の声に、五人は園庭に出る。滑
り台で車を走らせて、速さを競つて遊ぶ。

十一月二十八日、E男は、保育が始まるとすぐ
に、自分の車を手にして、O男に「競争しよう」と
声をかけて、自分から遊びに誘うようになる。この

頃から、E男が製作する場所も、部屋の隅にある教
師用の机から、真ん中においてある子ども用の広い
机へと変わってくる。そこで、同じように車を作っ
ている仲間に囲まれて、一緒に製作するようにな
る。工作の得意なE男の作る車は、形もよく、速く
走るので、他の子が、それをまねて作るようになる。
また、「スリップしないように冬用のタイヤに
する」と言つて、フィルムケースの蓋を二つ付けて
ダブルタイヤにしたり、コースに合わせて車の形を
変えたりといったE男の工夫が、説得力をもって、
周りに受け入れられていくようになる。車作りを介
して、E男のよさや存在感が、ゆっくりとではある
が、確かに仲間には広がっていくように感じられる。

一月十六日、M男と一緒に、担任に教わりなが
ら風を作っている。以前のE男なら、一人で作っ
て、一人で遊んだかもしれないが、この日は、車作
りでかかわりの生まれたM男やJ男と一緒に遊んで

いる。友達関係の広がりや、他の活動にもよい影響を及ぼしているように思われる。

一月二十三日、この日は、E男の提案で、S字型の滑り台で競争したり、遊びのルールを決めたりと、遊びをリードするまでになっている。この頃から、「E男(の車)、速いんだよな」とか、「おれは、(E男の車に)負けないぜ」、「E男、なかなかやつつけられないんだぜ」という、E男の車についての会話が聞かれるようになる。E男の車が、仲間の間で一つの基準になってきているようだ。

新しく仲間に入ったK男は、工作が余り得意でないが、E男の車体を型紙にして車を作っている。E

男は、そんなK男に対して、自分から「できた？」と声をかけて心配している。満足のいく車が作れて、楽しく遊んだK男は、昼食のお弁当の時に、自分からE男の隣にイスを持っていき、一緒に食べている。車作りをきっかけに、他の活動も一緒にしたいという気持ちを引き出している。

また、以前から一緒に車を作って遊んでいたJ男は、登園すると担任の次に、まずはE男に、「E男君、おはよう」と声をかける。J男にとって、E男は大切な友達になっているようだ。

一月三十日、E男は車のチーム名の取り合いからM男と喧嘩となる。すぐに和解するが、これも一人で



黙々と製作していた頃のE男には考えられない、友達とのかかわりの多様化の一つではないだろうか。

このように、単に車を作るという対象とのかかわりだけで、活動が終わってはいない。車を作って遊ぶという活動を通して、友達とのかかわりが生まれ、個性が認められるようになり、自信を得る。それが、今度は、自分から、友達とかわりたいという意欲へと発展し、人間関係を広げていくようになるものと考ええる。

保育者の援助

保育者の援助のしかたについて、製作場面を例に述べてみたい。

子どもに「作って」と頼まれた時、その子の

イメージに合うように、希望を聞きながら作る

「浦島太郎を作って」と頼まれた担任は、絵本を見

て描いてあげる。子どもは、本物そっくりの浦島太郎に満足して、活動に弾みがつく。また、担任のやり方をじっと見ていたこの子は、次からは、担任のまねをして、本を見て調べるかもしれない。

技術的に難しいことは手伝う

子どもの力や技術では無理なこと——例えば、硬い紙を切ったり、小さい穴にゴムを通したりなど——には、手を貸している。作品がその子の思い通りに出来上がり、本人が活動に満足できることを大切にしているように思う。

見本を示し、参考にするように促す

車の車体が上手く作れなくて困っていた子に、車の型紙を渡し、形を取らせる。そのことで、子どもは、つまずきをクリアすることができ、車を作りあげることができた。

使いそうな材料や道具などを、

さりげなく机の上に置いておく

登園前の部屋の子どもの用の机の上に、担任が、定規を一本と厚紙数枚を準備している。車作りに夢中になっている子が、登園するとすぐにその机の前に行き、厚紙に定規で線を引いて車の部品を作り始めた。担任の予想した活動に、びたりとはまっていたようにみえた。

友達とのかかわりを広げるような言葉かけをする

担任に、おもちゃの作り方などを聞きにくる子どもに、「たしか、○○ちゃんが、上手に作ってたわよ」、「○○ちゃんに、聞いてもらん」、「○○ちゃん、この作り方教えてあげて」といった言葉を返し、子どもたち同士のかかわりができるように、積極的に働きかけている。

新しい活動を紹介する

以前に作ったことのある、紙飛行機を作りたいと、いつてきた子どもに、「同じように、飛ぶものでも、凧もあるのよ」と言って紹介する。凧作りに興味を示したその子に、作り方を教えながら一緒に作ったところ、周りの子ども関心を示し、凧揚げが広まっていった。

このように、一人一人の子どもの思いや願いに応じた多様な援助をしていくことが、主体的に環境にかかわって遊び込む子ども達を育てているのだと感じた。

(埼玉県行田市立南小学校)